

## 『原三溪翁伝』第3篇第2章を読み進めました

1月の定例研究会では、『原三溪翁伝』の輪読を進めました。

### ◆輪読

発表者：山崎宣晴

範囲：pp.622～633

第3篇 性格と趣味

第2章 趣味

第3節 建築



三溪翁は近代稀に見る建築界で別格扱いされた人物である。翁の住居を世の金持連は、超俗の邸宅と言い、富豪達は先ずは自邸次に庭園と、全く翁とは逆で邸が主で庭が従である。翁には「鴻鵠之志」が潜む常人の及ばない一見識がある。

伊豆長岡の別荘南風村荘、京都臨川寺隣花庵や現存する隣花苑は、翁の好みと趣味から生じた建物であり「居は氣を移す」と孟子は謂う。翁の不断の生活の場所として最適で理想的建築であったに違いない。

三溪園には多くの国宝級建物があり、その中で群を抜き、世人が桃山御殿と呼ぶ往時の遺構がある。この臨春閣移築に際し十年間も考へ抜いた処に、三溪一流の深遠なる研究、位置、配置等々築庭に不可欠の要素を取り入れた翁の並々ならぬ努力がみられる。

正門を入り左方小高い丘上にある、園のランドマークタワー（主景）の三重塔が眼に留まる。限り無く上方指向の特性をもつこの宝塔は、三溪園の要の位置にあり絶妙そのものである。数寄者としての三溪の傑出した美意識が窺える。宝塔の移築が1914年、旧燈明寺本堂再建の完成が1987年、この親子の再会は73年振りであった。多分三溪翁は冥界で、微笑んでいるのではなからうか。

（山崎）



### ◆連絡会

会の後半では、来年度の活動内容について話し合いを行いました。